

研究ノート

海を渡る花嫁への一考察（1）

ーバーバラ・川上によるピクチャー・ブライド・ストーリーズを通してー

嘉本 伊都子

要旨

2016年にハワイ大学出版会から上梓されたピクチャー・ブライド・ストーリーズの著者バーバラ・川上(旧姓 オヤマ)自身、1921年熊本で生まれて三カ月で両親とともにハワイへ渡った。1920年には淑女協定、すなわち日本政府が写真花嫁へのビザ発給を自主的に停止した。1924年のいわゆる排日移民法によって、海を渡る花嫁は途絶える。バーバラは1909年から1923年にハワイへ写真花嫁としてきた一世のライフ・ヒストリーを丁寧に聞き取っている。特に、写真花嫁たちの定位家族と生殖家族の双方の輪郭がわる貴重な本である。本研究ノートは、なぜ写真花嫁たちが海を渡ったのかを定位家族に着眼し分析する。

キーワード：ハワイ、バーバラ・川上、写真花嫁、定位家族、生殖家族、1924年排日移民法

はじめに

本稿で取り上げる写真花嫁とは、19世紀末から20世紀前半、ハワイや北米へ出稼ぎに行った日本人男性が郷里の女性と写真を交換し、花婿の写真を手に海を渡った花嫁をさす。

1904～05年の日露戦争に勝利後、日本人排斥運動はサンフランシスコなど日本人が多く到着する西海岸を中心に広がり、中国人への排斥（1873年のページ法は中国人売春婦入国禁止法であり、1882年には中国人排斥法¹が制定される）とともに、日本人もその対象とされていった。サンフランシスコで日系アメリカ人の子どもだけの学校を設ける法律（1906年）ができた²。白人にとって「黄色人種」が持ち込む脅威は、イエロー・ペリル（黄禍）と呼ばれて

恐れられた。1908年のいわゆる紳士協定が日米間で結ばれる。日本人労働者がアメリカへ渡ることを禁止するものであるが、写真花嫁は除かれた。アメリカ側は、この家族呼び寄せにあたる写真花嫁を労働力とは考えていなかったからである。

だが、写真花嫁は貴重な労働力であり、勤勉な日本人が、農業を成功させ、次々にアメリカの土地を所有していく。このような状態を阻止するために、外国人土地法がカリフォルニア州では1913年に制定されるなど、「市民権取得不適格者」である日本人への土地所有に制限をかけていった。しかし、排日論者からみると、花嫁たちは「兎のように」（飯野、2000：45）に子ども産んでいく。アメリカ生まれの

1 1882年には中国人排斥法によって中国人の入国を禁止、85年には契約労働者（年季奉公人）の移民入国を禁止、さらに、91年には「白痴、狂気の者、貧困者または公共の負担となる恐れのある者、忌まわしい疾病または伝染病を持つ者、重要犯罪または破廉恥罪、または道徳的墮落を含む軽罪を犯した者、一夫多妻者」の上陸を禁止した。飯野正子 2000『もう一つの日米関係史』有斐閣、26頁。

2 1906年4月にサンフランシスコで起きた地震の後、10月に同市の教育委員会が、市内の学校の半数が消失し学校設備に不足をきたしたことを理由に、市内の日韓人学童全員を東洋人学校に転校させるという決議を正式に採択したことからはじまった。当時、市内の全学童約二万五〇〇〇人のうち、日本人学童は九三人であった（飯野、2000：30）

日系2世は、出生地主義の国籍法により自動的に米国籍となる、その名義で日本人が土地を買うようになる。一方で、血統主義の日本の国籍法では、両親が日本人であれば日本国籍が付与されるので、二重国籍となる。これもアメリカ人の反感を買った。

また、写真花嫁は、売春婦とみなされることもあった。そもそも、写真だけを交換し（交換しなかったケースもある）、一度も会わないで戸籍への登録をもって法律婚とする形式自体が「野蛮」、「非文明的」であるとみなされた。キリスト教の教会で式を挙げ、皆の前で承認を得ることが伝統的に重視されてきた西洋社会では、理解しがたい婚姻制度だった。もっとも、日本にある戸籍制度は、アメリカにはな

い。法的に「登録された結婚」とはいえ、偽装だと疑われるには、十分な客観的事実があった。写真とは似ても似つかぬ「年老いた」夫が出迎えに来て、「太平洋がなかったら歩いて帰る」（工藤、1983：61）と泣き出す花嫁もいた。しばらくして若い男性と駆け落ちする女性もいた。暴力夫から逃げ、自立するお金もなく、やむなく売春する女性も少なくなかった。

1920年に日本政府は写真花嫁へのパスポート発給を停止するが、ハワイは除外されていた（柳澤、2006：137）。ハワイでは1924年のいわゆる排日移民法によって、写真花嫁としての移民は完全に閉ざされることになる。

1. 研究方法

1-1. 『ピクチャー・ブライド・ストーリーズ』と著者バーバラ・川上

本稿は、写真花嫁として20世紀初頭にハワイへ渡ってきた女性たちを1980年代半ばにインタビューしたBarbara F. Kawakamiの『ピクチャー・ブライド・ストーリーズ』（University of Hawai'i Press、2016年）の紹介を兼ねながら、考察をしていく。

カナダへ渡った写真花嫁にインタビューした2冊の貴重な先行研究がある。工藤美代子は『写婚妻花嫁は一枚の見合い写真を手に海を渡っていった』（ドメス出版、1983年）において13人、真壁知子は『写真婚の妻たち カナダ移民の女性史』（未来社、1983年）において5人を、インタビューしている。写真花嫁ではなく、「写真で結婚した妻」という意味で「写婚妻」あるいは「写真婚」と表現している。工藤がインタビューした村上ツネがもっともはやく1907年にカナダへ渡っている。一方、バーバラ・川上とは親類関係にはない川上ヒサが1909年にハワイへ到着している。ほぼ同時期にカナダ、あるいはハワイへ移民した日本人女性たちへ、1980年代にインタビューしていることになる。カナダへ移民した女

性たちと比較し、共通点、相違点なども明確できるであろう。『ピクチャー・ブライド・ストーリーズ』もいずれ、邦訳が出るのが期待される。

移民史あるいは女性史として写真花嫁に関する先行研究は多数あるのだが、移民した先の経験に研究の比重が置かれ、日本でどのような経験をした女性たちが渡ったのかについては、工藤や真壁、そしてバーバラ・川上ほど丁寧な記述・分析はない。彼女達が直接写真花嫁にインタビューしているかどうか、という点が決定的に他の日本人による研究論文とは異なる。工藤や真壁は、学術目的で執筆しているのではないが、十分に資料としての価値はある。

バーバラ・川上によるハワイでのライフ・ヒストリーの聞き取りは、真壁や工藤によるカナダでの聞き取りと並んで、同時代の庶民にとっての「移動」を理解する上で、重要な資料であり、さらにそれらを比較することによって、多角的な考察・分析が可能となる。

バーバラ・川上が1993年に上梓した“Japanese Immigrant Clothing in Hawai'i 1885-1941”（University of Hawai'i Press、1993）は、＜神奈川

大学常民文化叢書5 >の『ハワイ日系移民の服飾史』（香月洋一郎訳、平凡社、1998年）として邦訳されている。服飾史研究のプロセスでインタビューを1世に行ったことが、『ピクチャー・プライド・ストーリーズ』に結実している。特に、バーバラ自身の生い立ちそのものが、写真花嫁たちに共通する記憶を呼び起こさせるに役立ったに違いない。服飾史がバーバラの主な研究テーマであったことも、生活の細部に目配りのあるインタビュー記録となっている。この点は、同時代を生きていない真壁・工藤のインタビューとは、一線を画している。一方で、同時代を生きてきたがゆえに、1世、2世にとって自明のことは聞き取られていなかったり、解説が省略されているという欠点もある。

1921年、生後3ヶ月でハワイへ家族とともに渡ったバーバラは、オアフ島にあるオアフ砂糖黍農園で育った。母がまだ39歳のときに父が死去し、著者を含め8人の子どもたちのとの生活を母は異国の地で営んでいった。『ハワイ日系移民の服飾史』には、バーバラ・川上（旧姓オヤマ）の父親の葬儀の写真が掲載されている。そのキャプションには「1928年7月7日に、モリタ・サカエがワイパフの曹洞宗寺院で撮った私の父オヤマ・トラサクの葬儀のパノラマ写真の一部。バーバラ・カワカミ所蔵」（川上、1998；256-257）とある。バーバラがまだ小学校に入るか入らないかのころである。女性たちは黒の和装であるのに対し、参列した人の4分の3を占める男性は7月に全員が背広である。何人かは帽子を手にもっている。バーバラのきょうだいと思われる子供たちは、洋服を着ている。

バーバラによれば、1世の葬儀の写真は第二次大戦中に破棄された。残存しているとしたら、故郷に送った写真を、持ち帰ることができたからだという。なぜパノラマ写真に参列者をおさめたのかについて、仏教の僧侶が彼女に説明した言葉を引用する。「そ

の人の親戚や友人のできることは少なくとも故郷の両親や親戚にいかにかに葬儀が感動的なものであったかを確実に知らせることでした。記念の写真はいかに多くの人が参列したのかのあかしとして役立ち、その結果、亡くなった人がどれだけ成功していたかのなんらかの目安となったからです」（同書；256-257）というニーズにこたえて、ワイパフのモリタ・サカエ氏が1907年ごろからパノラマ写真家として活躍したのだという。20世紀初頭には、結婚、葬儀と写真という媒体が庶民の間でもライフ・イベントの重要な局面で使用されるようになっていく。それは「故郷」との連続性を繋ぎとめるものとして機能したといえよう。

小学校に上がるころ、父を亡くしたバーバラは、8年間のイングリッシュ・スクール（公立学校）を卒業すると、2世の女性がつく典型的な職業への道を歩み始める。プランテーションのある地区にある私立の裁縫学校に入学した。仕立屋を経て、ドレス・メーカーとして38年間働いたのち、53歳で高校卒業資格取得に合格し、さらには大学への進学を決意した。テキスタイル・アンド・クロージング、日本では家政学であろうか、その学士号（BS）を取得、さらにはアジア学の文学修士号（MA）を取得している。日本移民の服飾に関する研究者でもあるバーバラは、ロサンゼルスにある日系博物館に研究の過程で収集したであろう日系人の服飾史がわかる現物を寄贈している。

バーバラ・川上は日系移民史の語り部の一人でもある。Web上のディスカバー・ニッケイでは、彼女の人生や写真花嫁のことが、英語で語られ、日本語の翻訳も掲載されている³。その中の<写真花嫁と「仮夫婦」>のパートでは自身の母親も仮夫婦としてきたことが語られている。彼女は、母親を含め、多くの写真花嫁たちに囲まれて育った。1世の女性たちに写真花嫁として1909年～1923年の間にハワイ

3 ディスカバー・ニッケイ（2018年7月7日アクセス）2004年2月19日バーバラ・川上へのインタビュー。
<http://www.discovernikkei.org/ja/interviews/clips/259/>動画は英語であるが、下記には日本語に翻訳されている。
<http://www.discovernikkei.org/ja/interviews/clips/260/>

へきた経緯、経験をつぶさに聞き出している。

『ピクチャー・ブライド・ストーリーズ』は、北は福島から南は沖縄出身まで15名の写真花嫁のライフ・ヒストリーで構成されている。家族社会学では、自分が生まれ育った家族を「定位家族」、自らが配偶者とともに子どもを再生産する家族を「生殖家族」と区別するが、その両方をバーバラ自身が直接聞き取ったケースについてはまとめられている。本稿では、彼女たちの日本の「定位家族」に着眼する。

すでに邦訳されている『ハワイ日系移民の服飾史』も参照しながら、1910年代前半、1910年代後半、1920年代前半と花嫁たちがハワイに到着した期間にわけ考察していく。紙面の都合上、本稿では1909年から1915年の間にハワイに渡った女性たちについて考察する。ただし、1914年に沖縄から来た写真花嫁については、廃藩置県、琉球処分など、沖縄特有の

事情から1920年代前半に複数沖縄から移民している女性たちと一緒に紙面を改めて考察していく。

『ピクチャー・ブライド・ストーリーズ』にインタビューがまとめられている写真花嫁たちを、ハワイに来た順にならべ、その出身地と出生年、享年を記したものが図表1「バーバラ・川上著“Picture Bride Stories”よりハワイ到着年別のリスト」である。バーバラは、おおよそ到着年の順番に花嫁のインタビューを並べているが、ナンバリングされることもなく、チャプター番号もない。そこで執筆者がバーバラの頭文字のBとそのあとに続く番号によって、その花嫁のケースがバーバラ・川上の本の中で何番目に採録されているかを示し、花嫁がハワイに到着した順番に並べ替えた（図表1）。

第1部で取り上げるのは、1915年にハワイへきた、B08のキシ・オキ・ツジムラまでであるがB07のサ

図表1 バーバラ・川上著“Picture Bride Stories”よりハワイ到着年別のリスト

	*	来布年	名前	旧姓	出身地	生年・享年
1	B02	1909	Hisa Kawakami	Okabe	福岡県朝倉郡長者町	1889-1978
2	B03	1911	Soto Kimura	Shigehiro	山口県玖珂郡岩国市	1892-1990
3	B04	1913	Tatsuno Ogawa	Aoyama	広島県神石郡さんまんまち	1892-1991
4	B05	1913	Tei Saito	Shida	福島県信夫郡鎌田村	1892-1989
5	B06	1914	Ushii Nakasone	Shimabukuro	沖縄県(現在沖縄市)美里村	1897-1990
6	B07	1915	Fuyuno Sawai	Tani	広島県双三郡(現在の三次市)	1895-1991
7	B08	1915	Kishi Oki Tsuji-mura	Oki	広島県安佐郡可部村	1896-2002
8	B09	1916	Kikuyo Fujimoto	Murashige	山口県岩国市	1898-2008
9	B10	1916	Shizu Kaigo	?	山口県いごち村	1896-1998
10	B11	1917	Haruno Tazawa	?	福島県安達町	1897-1994
11	B12	1918	Taga Toki	Inokuchi	熊本県八代郡	1901-1991
12	B13	1918	Ayako Kikugawa	Murayama	熊本県鹿本郡米野岳村	1899-1997
13	B14	1920	Kama Asato	?	沖縄県宜野湾市普天間	1904-1989
14	B01	1922	Kaku Kumasaka	Konno	福島県伊達郡湯野村	1899-1987
15	B15	1922	Kana Higa	Nakao	沖縄県国頭郡羽地村	1901-2001
16	B16	1923	Ushi Tamashiro	Kakazu	沖縄県那覇市国場	1902-1986

*バーバラ・川上は、B01から昇降順に執筆している。“Picture Bride Stories” (2016)より嘉本作成

ワイ・フユノのケースについては、フユノの定位家族に関する記述がない。夫のダイキチを中心に娘スマコから聞き取ったものである。そこで、パイナップル・プランテーションでルナ（管理者）まで勤め上げたダイキチの例を簡単に紹介する（B07, 121-140）。『ピクチャー・ブライド・ストーリーズ』からの引用は、以下（図表1の番号頁数）に統一して表記する。原文は英語で、引用の日本語はすべて嘉本による訳であることを断っておく。

広島県で1883年生れのダイキチは、1905-06年の日清戦争の時、8カ月間日本軍にいた。ダイキチがハワイに着いたのは1907年である。アメリカ政府が、日本政府にハワイのパイナップル・プランテーションで日本人が働くことを許可する条約を結んだあとと娘は語っているが、1898年にアメリカがハワイを合併し、1900年にハワイがアメリカの準州となつてから、合衆国によって、契約労働者の移民は禁止されていた。よって通常の移民史の区分では、1900～1908年は自由移民時代と呼ばれる。ダイキチと同じ年に移民した、B08のツジムラ氏は、兄の呼び寄せ移民とある。ダイキチは、おそらく父の呼び寄せだったのではないか。なぜなら、ダイキチはハワイ生まれの2世の女の子とは結婚したくなかったと述べ、ダイキチの父が長男ダイキチの嫁を探しに日本へ帰ったとあることから、ダイキチの父もハワイで働いていたことがわかる。

ダイキチは1915年フユノがハワイへ着くとコトヒラ（琴平・金毘羅）神社へ連れて行き結婚式をあげた。

マネージャーのJ.ディクソン・プラットからダイキチは厚い信頼を受けた。プランテーションを管理するルナの役割に3回もオファーがあったが、ダイキチは断った。ルナはプランテーションを所有する白人と、現場で働く多くは移民である労働者との間に立って、労働者を管理する現場監督としての役割を担う。ポルトガル人がルナである場合が多かった。

日本人男性がルナに抜擢されるのは異例ともいえ

るが、3度も断った理由は、ダイキチが英語を話したり書いたり、読めなかったからだ。労働者は日本人だけではない。フィリピン人や中国人、コリアンなどを束ねるにも、彼らが何を言っているかわからなかった。しかし、ルナになったダイキチは、月28ドルからスタートして月収100ドルにまで上り詰めた。T型フォードを与えられ、妻のフユノは、リバティ・ハウス（ハワイ本社の百貨店）で買い物ができる裕福な1世となった。ダイキチは、1949年に定年後、パイナップル・スタンドをオアフ島の幹線道路沿いに設営した。1953年に当時19歳の皇太子（平成天皇）がイギリスへの旅路、ハワイを訪れた。ドール会社の社長となったプラットは、ダイキチを皇太子に紹介し、皇太子とダイキチは握手をした。このように、ダイキチを中心に記述されている。

フユノは、ワヒアワの本願寺において1世の第1婦人会があり、そこで活躍した。フユノの生殖家族については、あまり詳細には描かれていないので、ダイキチとの生殖家族についてのみ記述する。

前述した理由により、沖縄出身のB06は、第3部にて紹介したい。

1-2. 写真花嫁の時期区分と考察期間

1-2-1. 官約移民時代(1885-1894年)～私約移民時代(1894-1899年)

江戸時代、鎖国政策により長きに渡って日本人の海外渡航は禁止されていた。ハワイに限って言えば、明治元年にいわゆる元年者と呼ばれる150余名の日本人をハワイ王国の駐日総領事ユージン・ヴァン・リードが明治政府の許可を得ないままハワイへ連れて行ったことがある。ハワイのカラカウア王が1881（明治14）年に来日し、明治政府と契約労働者をハワイに送り込むいわゆる官約移民時代は1885年から1894年の廃止までである。この官約移民あるいは契約移民時代から、仮夫婦渡航という形の上では夫婦としてハワイへ来るものが多かった。バーバラ・川上の母は、父と出会った後、日本へ返されたので、

自分の妹の婚約者と仮夫婦となりハワイへ渡り、離婚している。ハワイの日系移民の離婚率の高さを示した論文があるが、それは「本当の意味での離婚ではなかった」と、バーバラは証言している（注3参照）。また、日本人男性移民にとって、ハワイはステップینگ・ストーンであり、最終目的地はカリフォルニアだったと述べている。契約移民時代にも、契約期間が終わるとアメリカ本土に転航するものも多く、1907年にはハワイから米国本土への転航が禁止されている。

離婚率に言及している柳澤幾美によれば、1885年の官約移民時代から私約移民時代（1894～1899年）を経て自由移民時代の1907年の間に、ハワイの巡回裁判所に訴えられた日本人による離婚件数は、833件で、1世の総カップルの約2割に当たった。その訴えのほとんどが女性側からの訴えであったという（柳澤、2005：191-192）。バーバラが述べるように、仮夫婦渡航というハワイ移民の特殊事情があったにせよ、明治時代の日本における離婚率の高さは、世界でも類をみないことで知られている。湯沢雅彦は『明治の結婚 明治の離婚』の中で、民法、国籍法が施行される1897年（明治30）ごろまでは、人口千人あたり2.6から3.4までの高い水準であり、「その後の百年間にこれに匹敵する高離婚率の年はない」（湯沢、2005：91）と述べている。柳澤の考察したハワイ移民の離婚に関する時期は、日本でも高い離婚率の時期と重なる。この行動の背景には、結婚・離婚に対する規範が、庶民の間では「近代化」の途上であったとも考えられる。

1-2-2. 自由移民時代と呼び寄せ時代

1900年～1920年頃まで

1907年紳士協定によって、日本人男性移民が制限されるようになると、呼び寄せ移民としてきょうだいの家族や写真花嫁は制限がなかったことから、呼び寄せ時代といわれている。

この期間に、政治的、思想的な変化を引き起こし

た第一次世界大戦が1914年に勃発した。その戦後処理のための1919年のヴェルサイユ会議で、日本は人種差別撤廃条約案を提出するが、否決された。その翌年日本政府は写真花嫁のビザを停止した。しかし、その努力もむなしく日本人に対する人種差別は、1924年いわゆる排日移民法によってむしろ強化されてしまった。

小山静子は『良妻賢母という規範』の中で、女に対する（国家の）統合のありようや期待は、社会的状況の変化に応じて変わっていかざるを得ないものであり、その最初の転換は、第一次世界大戦を契機としてやってきたと述べている。さらに「第一次世界大戦中から戦後にかけて、女をめぐる国の内外の状況が大きく変化する中で、従来の女子教育観は規範としての力を弱めつつあった。それに伴い、理想とされる良妻賢母像も修正・再編されていった」（小山、1991：94）と論じている。

1914（大正3）年に勃発した第一次世界大戦の影響が写真花嫁にもみられるのであろうか。日本において結婚・離婚に関する規範がどのように庶民に広がり変容してきたのかを考察する一助として写真花嫁のライフ・ヒストリーから導きだしてみたい。つまり、本研究の目的は、移民史としての写真花嫁研究ではない。

バーバラ・川上は「花嫁」の生殖家族が離婚したケースを採録していない。ましてや宮本なつきが指摘するような、仮夫婦渡航という形式がハワイにおける日本人売春婦の増大につながり、19世紀末ハワイの登録売春婦（licensed woman, common prostitute）のほとんどが日本人女性（1898年には157人中115人、1899年には269人中226人）であった（宮本、2002：47）ことなど、日系人の歴史の「汚点」とみなされるような側面にはほとんど言及はない。もっともベスト患者が発見され、チャイナ・タウンが防疫措置として焼却された際、1900年日本人が多く暮らしていた地区にも延焼が広がり大火災となった。こうして日系人の歴史のなかでは暗黒の時

代と呼ばれた1890年代は終焉する。だが、日本人売春婦がその後も存在したという（宮本、2002）。

20世紀初頭、日本人女性をめぐる環境は著しく変化する。日本人女性は売春婦だとみなされる視線から、植民地の拡大により日本型「良妻賢母」という規範をアジア諸国に誇示し始めた時代でもある（陳、2006）。

ハワイの、大半がパイナップルや砂糖黍畑で日々、労働をしながら多くの子どもたちを育てあげた彼女たちを、バーバラは良妻賢母という言葉では形容し

ていない。バーバラは、写真花嫁の名前の下に「ガンバレ精神」（B08）とか「竹のように強く弾力性がある」（B05）、前述のサワイ・ダイキチを形容した「金のパイナップルの香り」というように象徴する言葉をそえている。名前の表記については、『ハワイ日系移民の服飾史』の記者香月洋一郎がバーバラ本人に漢字表記を確認して、漢字表記がその中に記されているものは、漢字を使用したか、わからないものについては、カタカナ表記で統一した。

2. 写真花嫁の定位家族 1889年～1896年出生コーホート

2-1. 定位家族と生殖家族をつなぐ「トコロノヒト」

写真花嫁の多くが、夫の戸籍に登録されて「夫婦」となり、披露宴では蔭膳で三々九度を交わし、およそ6か月間渡航のビザ（査証）が下りるまで、まだ見ぬ夫の実家で暮らした。神戸または横浜から、海を渡っていった花嫁たちのほとんどが、近隣の村よりも遠くへいく初めての旅が、嫁ぎ先のハワイだった。

福岡県朝倉郡で旧姓オカベ・ヒサ（B02, 40-53）は1889（明治22）年2月6日に生まれる。ヒサのライフ・ヒストリーはバーバラ自身が彼女自身への聞き取ったのではない。娘メーベル・カワカミ・ハシサカ（カウアイクッキー経営者一族の1人）が1976年に録音した母ヒサが語る20分ほどのテープと、メーベルからの聞き取りである。写真花嫁として1909（明治42）年20歳の頃にハワイへ来た経緯を引用しよう。

ヒサは幼少期に父親を亡くし、母親は再婚した。義父は、ヒサを学校へ行かせず、蚕の餌である桑の葉を摘むなど仕事をさせ、他の子と遊ぶ暇もないほど忙しい生活だった。ある日、蚕をあたためるためのランプがもとで火事となり、すべてを一家は失い、夜逃げをした。義父はい

つも彼女に冷たくあたり、子守だけでなく、着物の原料である木綿を他の農家で摘むなど稼がせた。母親は再婚相手に依存するしかなく、黙って従った。

何年かたつと、川上フクジロウの友人が、ヒサとフクタロウとの間に写真を交換し、お見合いをさせたいと言ってきた。フクタロウは、カウアイ島の砂糖プランテーションで働いていた。近隣の村より遠いところへは行ったことがないヒサにとって、これは新しい人生をはじめることができるかもしれないと思った。彼はとても傑出した若者だと聞いた。写真を見たとき、彼はとてもいい男だと思った。村では少年と少女は社会的な交際をすることは許されていなかった。ヒサはまた、カウアイと呼ばれる美しい島について、わくわくするような話を聞かされた。

結婚が決まると、伝統的な手続きが行われ、6か月間ビザが下りるのをまった。フクタロウは不在のまま、オカベ・ヒサの名前は、彼女の戸籍から除かれ、フクタロウの川上家の戸籍に入った。夫がハワイにいようと、日本政府の法律によれば、彼らは正式に夫婦になった。（B02, 47-48）

ヒサ自身へのインタビューではないので、ヒサに他にきょうだいがいるのか、一人っ子なのか、また異父きょうだいがいるかどうかは確認できない。だが、母子家庭となつては、生きていくことは難しいことがわかる。祖父母がいたかどうかは何も書かれていない。1978年にヒサは死去していることから、バーバラも本人に確かめることができなかつたと思われる。

ハワイに到着すると、知らない土地で不安一杯の花嫁のほとんどが2日とたたないうちに畑で労働をしている。

「不慣れな、見知らぬ土地にやってきましたので、私は不安で一杯でした。しかし、すぐに *some tokoro no hito* 「何人かのトコロノヒト」、[people from Soneda village] つまり同じソネダ村出身で彼女より早くきていた写真花嫁たち、ホアシさん、ミヤバラさんなどに会い、新しい家になじむよう手伝ってくれました。すでに畑に出る仕事着が用意されていましたので、すぐに働き始めました。キビシゴト=黍仕事(黍畑で仕事をする)を始め月13ドルでした。「銭がすくないけ」、つまり稼ぎが少ないのでお父さん(嘉本注:フクタロウのこと)と相談して二人で「ハパイ(ハワイ語で運ぶ、持ち上げる)コギヤング)で働きはじめました。カップルです仕事で、私は *paila*[piler] 剥ぎ取り、キピアツメル(実った砂糖黍を集め束ねる)、お父さんが肩に束にした黍を *hapai* (運ぶ)、砂糖黍の車まで板の道を歩いて、道路にある車まで運びました。働きもののお父さんは体が強くしかも早かったです。イッシュニよく働きましたよ。夫婦で月70ドル稼ぎました。だがすぐに妊娠し、ノリトが生まれるぎりぎりまで仕事をしました。」(B02, 41-42)

ヒサの肉声が録音されたテープからの引用であるが、

どこからどこまでが日本語なのかがわかりにくい。イタリック体の “*tokoro no hito*” という表現はローマ字表記のままバーバラの書籍のあちこちに散見できる重要なキィ・ワードである。ここでは女性達を示し、おなじヨネダ村からの人々と括弧をつけて説明してある。

男性を指す場合は “*tokoro no mono*” あるいは “*tokoro mono*” と表記されることが多い。これらの表現は、必ずローマ字表記で引用する。例えば、B04小川タツノが1913年につくと緋の着物のままホノルルの「大神宮」でハワイ領の法律に従って結婚したという。「その夜はコメヤホテルに泊まりました。翌日、私たちは *a tokoro mono* を探して、村にいる友人から託った *a kotozuke* 贈り物を彼に渡さなければなりませんでした。Moiliiliで彼を見つけたので、そこでもう一晚過ごし、家族や友人についての情報を交換しました。」(B04, 77)とタツノは語っている。この場合、タツノの言葉だとわかる。ここでは同郷出身の男性である。B07サワイ・フユノの娘スマコが思い起こしている文章で、「年配のフクナガ氏は、広島からの *a tokoro mono* で、とてもいい友人でサワイ家をたびたび訪れた」(B07, 128)とある。「ところもの」となると、日本語としては違和感があるが、英文の説明もなく使用されている。スマコは2世で彼女の語った言葉の引用ではなく、バーバラの言葉でまとめられているが、ここにも英語で意味の説明はなく固有名詞のように使われている。

次に紹介するB03のソトとクニヨシのなれそめも、*a tokoro mono* で両方の家族を知っている人が、“He talked to my parents and wanted to *shimpai* (matchmake) Kuniyoshi and me.” とある。シンパイが、お見合いとなるのか、理解ができなかつたので、そのまま引用する。「心配をしてお世話をする」ぐらいの意味なのではないかと思われる。

『ハワイ日系移民の服飾史』には、トコロモンとして次のように、説明されている。長くなるが、引

用したい。

一世の男にふさわしい花嫁をさがす時、仲人はふつう彼の郷里の村の外に目をむけることはなかった。ましてやその郷里の県の外側にまで目配りが及ぶことはなかった。ハワイでは同じ村から来た人たちのきずなは、とても緊密になっていた。一世の人びとは貧乏の苦しさや家族から離れて暮らす寂しさをわかちあっていたからである。同郷出身者たちはトコロモン（トコロモノというものの言葉を口語的に縮めた語で同所からの出身者という意味である）と呼ばれていた。そのきずなは危急の時には特に重要だった。そんな時トコロモンは互になぐさめあい助けあって頼ることができた。トコロモンの葬式に出るためには、一世の男女は、遠近を問わず、他の島からであろうが集まった。トコロモンの家族の間での婚姻は、そのきずなをさらに強くした。第二次世界大戦までは二世の結婚ですらその多くはトコロモンの間でとりきめられた。そして自分と同県出身以外の人との結婚は、あるまじきこととすらみられていた。

(川上、1998：35)

バーバラは熊本生まれであることから「トコロモン」のほうが、得心いく。『ピクチャー・ブライド・ストーリーズ』にはトコロモンはなく、「ところのひと」「ところもの」となっているが、写真花嫁たちが、出身地である共同体とは切っても切れない関係であることがわかる。また2世どうしの結婚も同郷出身であることが重要視されていた。

2-2. 定位家族に吹き込むハワイ熱と緋の着物

一般的に日本の農民は苦しい暮らしをしていたと想像しがちだが、日本の家屋と比べて、ハワイの夫が暮らす家のみた写真花嫁の多くが、その劣悪さに驚き、乞食がすむ部屋かと思ったという花嫁もいる。

山口県岩国市で旧姓シゲヒロ・ソト (B03, 54-71) は父キサクと母 (旧姓藤岡) トキとの間に1892年に生まれた。

ソトも含め4人女の子と6人男の子というきょうだい構成である。代々農家で、侍の家ではない。比較的大きな家に暮らしていた。稲、麦、粟 (粟餅にするため)、様々な種類の野菜それらを市で売っていた。両親は一年中、他の村人たちとおなじように働きものであった。

明治時代は、義務教育が尋常科の4年のみで、高等2年まで伸びた。だが、上の学校まではいかせてやれないのを両親はわかっていたので、我々(子供たちに)にしっかり勉強するようにさせた。農作業は男の子だけにさせ、女の子は、裁縫、生け花、日本刺繍、礼儀作法、茶道 (村の茶道の先生に習った)、お手玉、かるた、羽子板、尋常科4年まで義務教育。それはいいお嫁さんになるために。子供のころは、心配することもなく、妹や姉と運動や遊びを楽しんだ。(B03, 56-57)

ソトの定位家族は大所帯で、比較的大きな家に暮らしていた。ハワイで、夫の暮らすおそらく単身者用の家に案内されたときは「ほいと部屋」、すなわち乞食が暮らす家かと思ったほどだ。布団の形が悪いので、落ち着くと布団をほどいて、カヴァーを洗い、縫い直したという (B03, 62)。

1903年に16歳で山口にも流れてきたハワイ熱にかされてたった一人の跡継ぎ息子にもかかわらずクニヨシは、3年契約でハワイに行ったきり帰ってこない。母は、そんな息子を嫁のソトに連れ戻してほしいと思っただろう。1世にしては、大柄 (5フィート3インチ、およそ158センチ) だったソトを頼もしくおもったのだろう。一方、ソトの母親は、娘をアメリカ本土にいる日本人男性へ嫁がせたかったようだ。二人は同じ村で育っているが、お互いのこ

とはよく知らなかった。この本の中では「日本の少女は、仲良くしてはいけなかった。学校でさえも、席を隣同士にはならないし、話してもいけなかった」(B03, 58)という紋切型の説明がなされる。同じ村でもほとんど、話したことがない者同士であることが繰り返し強調される。

仲人(媒酌人)が間に入って、ソトの戸籍が木村家に入り、ビザが下りるまで待った。

山口県岩国市には「ハワイ熱」が吹いていた。岩国市は、多くのハワイ移民を輩出し、日本ハワイ移民資料館もある周防大島にも近い。ソトの母親の希望からもうかがえるように、アメリカ本土の話も入ってきている。ハワイから戻ってきた人の話からソトは「ハワイは天国だ」とも聞かされている。だが、実質的なアドバイスもしている。被服に関心のあるバーバラは必ずどんな着物をもってきたのかを聞いている。ソトは次のように答えている。

「親類がハワイにいい着物をもって行くなど私に言いました。‘ドレッシーな緋の着物とカジュアルな浴衣だけ持っていきなさい。それで十分よ！すぐに黍畑で仕事をするのだから！’ですから、紋付はおいていきました。銘仙とお召しにドレッシーな絹の着物と金襴の帯とアクセサリーだけ持ってきました」(B03, 58)

クニヨシとソトの結婚式として、1911年に写された写真には、借金を背負ったクニヨシでも黒のスーツ姿で立っている。椅子に腰かけたソトは日本髪を結い、銘仙に羽織である。

神戸港から多くの花嫁と出発しているが、1911年11月の海は荒れ、何も食べられなかったという。9日～10日間の船中、多くの花嫁が船酔いをしている。ソトは、家事を手伝ったことがないが、同じく10人きょうだいの第1子として食事の用意をまかされていた女性もいる。1898年11月20日に生まれた旧姓アオヤマ・タツノの父セイシロウは広島県神石郡で桶

屋をしていた(B04, 72-85)。

「私は、10人の子の1番上です。とても幼いときから、家族の食事の用意を7人の兄弟と2人の妹たちの面倒をみながら、していました。両親はとても忙しかったからです。私の母は、農業のほとんどをしていました。稲、粟、小豆、麦、大豆、いろいろな野菜を1年中作っていました。村ではだれもが自分で味噌を作っていました。とてもおいしかったです。私の父は、桶屋で、彼の兄弟と協力してやっていました。お正月などのお休みの日は、父は醤油やお酒をつくることから、注文をとっていました。だいたい、300から500の桶を契約していました。私は8歳のときに学校にいきはじめましたが、学校から帰ると母が畑にいるので家事のほかにも畑仕事も手伝いました。朝から晩まで働き詰めで遊ぶひまなんかなかったです。私の体は働くようにつくられているのです」といってため息をついた。(B04, 74)

15歳で別の村に緋織を住み込みで習い、18歳までは賃金はなく、18歳から20歳までそこから賃織りをまかされ、10反を仕上げた30銭給料をもらったという。とても早く織ることができる褒美をもらった。

夫となる広次は従兄弟である。だが祖父が脳卒中で倒れると義理の両親と暮らしながら、祖父のお世話を手伝っている。

1913年横浜から多くの写真花嫁らとともに出発するのだが、船酔いで苦しむタツノの隣に、船酔いしない女性がいた。毎朝化粧をして、綺麗な着物をきてデッキにいくと、乗客のなかにボーイフレンドを見つけたという。彼女の下船後の消息をタツノは知らない。船の中で、夫以外の男性と恋に落ちる話は写真花嫁関連の論文にもしばしば登場する。タツノは実際に目撃していた。

日本人移民が独立したパイナップル畑をもってお

り、タケタ一家が経営していた。そこで夫は働いていたのである。タケタの妻は、夫の姉で、タツノはこの小姑に「ただ、我慢」だった。夫の広次は寡黙な人物で、お酒もたばこもしないいい父であり、いい夫だった。だが、彼のきょうだいは意地悪である。彼らが送金した大部分は実家の借金の返済に使われた。だが、後に彼の兄が贅沢をするために使っていたことを知る。だが、送金にタツノは反対したことはない。その理由を次のように語った。

「その理由はね、私が広島にいた頃、若い男がプランテーションに働きにハワイへ行った。しかし、その男は一度も彼の両親に仕送りをしなかった。彼の父親は村中をまわり、食べ物を求めた。息子はギャンブルでお金をなくしたと噂があった。彼の祖母は、半分目が見えなかった。よく私の家に物乞いにきた。彼女に何か施すと、隣の家まで送ったものだ。そういう姿を見ているので、広次の親に同じことが起こらないようにと思ったのよ」(B04, 81)

ソトの夫も博打にのめり込んで、連絡をよこさなかったのと同様に、タツノが広島の村でハワイへ出稼ぎに行かせた家の倅も博打や酒にお金が消えていたのであろう。ソトの夫は彼自身の母親のたくらみによって、ソトが花嫁として送り込まれたが、おそらく、タツノが目撃した一家の倅のところへ嫁に行く人はいなかったのではないかと思われる。

タツノの1912年に写した写真(B04, 74)は、『ピクチャー・プライド・ストーリーズ』のハードカバーの表紙に採用されている。彼女のおじが「丸い瓢箪に目鼻」とからかった頃の写真であるが、きりっとした眉、しっかり者の目、ふっくらと健康そうな頬をして彼女自身が織り、縫った緋の着物を着ている。引き締まった唇にも意思の強そうな、印

象に残る顔立ちをしている。日露戦争後に流行った二百三高地という日本髪のかき上げの結い方なのか、執筆者には判別できないが、バーバラ・川上は髪型には興味がないらしく、すべてボンパドールと呼んでいる。

花婿の家族が日本の役場に婚姻の登録を忘れていたので、広次は移民局でタツノの花嫁申請をし、もう一度結婚式をするためにホノルルの大神宮に連れて行き、到着時にきていた緋の着物のままで結婚式をあげた。「タツノはコウリ(柳行李のこと。嘉本注)のなかに紋付を入れてこなかった。実家の両親は彼女にそれを買えるだけのゆとりがなかった。というのは他に養わなければならない九人の幼い子供たちがいたからである(彼女はようやく黒の紋付を買った。パイナップル農園で働いていくらかのお金を稼いだのちのことである)」(川上、1998:72)。この時代、バーバラは、常に紋付を持参したかどうかを確認している。

2-3. 医学を志した高等女学校卒の花嫁

－ 1等船室での旅立ち－

福島県信夫郡出身、旧姓シダ・貞は1913年生れで、女学校を出ている(B05, 86-103)。5人の男きょうだい、1人の妹がいる。長男は、結核で医学部卒業前に死去。次男は腸チフスで死去。三男は中央競馬のディレクターまで上り詰めるが、その下の弟は戦争で死んでいる。貞は、1913年16歳の若さで福島県立高等女学校を卒業する。『学制百年史 資料編』⁴によると、高等女学校は、貞が卒業した1913(大正2)年、国立2校、公立259校である。中流階層以上の、理解のある親をもつ女子しか進学することはできなかった。排日移民法が成立する前年の1923年には公立の高等女学校数は2倍以上の544校となる。第一次世界大戦前後で良妻賢母規範が、本格的に国家に役立つ女性の排出へ転換する前の教育を貞は受けていたことになる。しかも飛び級で卒業

4 文部科学省ホームページ『学制百年史 資料編』2018年09月10日アクセス。
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317930.htm

している。50人クラスの総代をつとめた。後に同窓会で貞のクラスから、シカゴに嫁いだ女性もいたことが判明する。貞は、高等女学校には、汽車で通学するのであるが、男の子とは話もしない。もし、中学に通う男子生徒と話しをして目撃されると、退学させられたという。貞は英学校へ進学を希望するが、ハワイへ嫁ぐことになる。ハワイへ行く若者のグループを学校からの帰り道にみたことがある。彼らは砂糖黍畑かパイナップル畑に働くためにハワイへ行くのだと村の人々が話しているのが聞こえた。貞自身はハワイへ行くことに対してどう感じていたか、さらに自身の進路について語っている部分を引用しよう。

「私はまだ子供だったけど、彼らを気の毒に思いました。聞いたところによると、農家で、貧しい、教育のない人がハワイ政府に雇われていくのだと。日本から遠く離れた、変な国に海を越えて行くのだと思っていました。

母方の祖父母は大阪にいて、彼らの将来の計画を実行すべく私を医者にするために大阪に私は行くはずでした。祖父は、彼の跡を私に継いで欲しかったのです。兄のまさおが医学部を卒業する前に死んでしまいましたが、薬剤師になった弟と4人で病院を開こうと思っていたのです。」(B05, 90)

医者になる道は、ハワイのプランテーションで成功した斉藤正成が嫁探しに福島に帰郷していたことで、ハワイへの道となってしまう。仲人を通してかわいい女性と見合いをしたのだが、パイナップル畑での仕事には耐えられないだろうと、この話を正成は断った。この女性がたまたま、貞の母方の従姉妹だった。母は、実家の大阪で美しい熱帯の太平洋の島の話が聞かされていたこともあり、正成を将来が約束された青年だと見込んで、母は貞を正成と会わせた。会ったからといって、必ずしも結婚を強制し

たものではなかったが、正成をみると母はとても強い印象をうける。黒いスーツの洋装の正成は福島では目立った。正成と会うとすぐ、貞は出産したばかりのおばの手助けに行かされる。その間に、母は正成と貞の結婚の段取りをつけてきてしまった。父は婿養子で、何も言えず、母の決断で貞の結婚が決まっていった。

母親の発言権が強いことは儒教の倫理とどう折り合いをつけたらいいのかかわからないが、貞の言葉をバーバラは引用している。「その頃は、儒教的倫理観がとても強く、子供たちは両親に従うように教えられていました」(B05, 92)と悲しい声で答えた。こうして貞は、女学校を出た年の9月には、ハワイへ到着している。なぜ、母親の祖父母が大阪に暮らしているにもかかわらず、婿養子の父と母親が福島で暮らしているのか。母親の父親が農家をしていたともある。父親は農家を継ぐための婿養子である。高等女学校に入れるだけの財力がなぜあったのか、など疑問が多い。

福島の村で盛大な結婚式をあげ、横浜から天洋丸の1等船室でハワイへ旅立っている。1等船室の乗客は、他の移民のように検査がなかったようだ。写真花嫁が夫ともに、1等船室で海を渡るのは、珍しいケースであったろう。「食堂でお食事することもできたのですが、私たちは、ナイフとフォークを使った西洋式のテーブルマナーも知らなかったので、食事は自分たちの部屋でとりました。ボーイが3食給仕してくれました。アメリカ料理か日本料理かを選べました。夫も私も若くてナイーブでした。英語も文化もわからなかったのですから。1等船室の旅の恩恵を何一つ受けず、ずっとお部屋にいました。どれだけ経験がなかったか、今では笑うことができますけどね。1世で1等船室で来たのは我々だけだったと聞いています」(B05, 94-95)。

福島の家の描写はないが、比較的大きな家に貞は暮らしていたと思われる。ハワイの家を「まるで村の鶏小屋！」と動揺を隠せなかった。母親は贅沢で

富のある男の妻に娘はなったと思っていたに違いないので、母親には一度も手紙を貞は出していない。だが夜が来ると、孤独で涙がでた。誰も知らない、親戚もいない、頼れない、話せない状況で、慣れない家事に追われた。夫のビジネスパートナーの小野タモツ氏の妻は、貞がくる数年前に福島から写真花嫁としてきた人で、彼女を手伝いながら、20人から40人（バイナップルのシーズンによって人数が異なる）分の食事や弁当を作った。

2-4. 三軒先の「写真花嫁」

キシ・オキ・ツジムラ (B08, 141-159) は、1896年生まれで2002年に死去、3つの世紀を生きたことになる。広島県安佐郡出身で本名は、オキ・キミである。1907年兄の呼び寄せ移民として15歳のときハワイへ渡ったツジムラ・ケイジの花嫁になるためにツジムラに戸籍を登録した際、キシ・オキ・ツジムラとなったことを、ハワイのイミグレーションで知った。

1000戸も軒を並べる比較的大きな村であるにも関わらず、オキ家とツジムラ家は3軒しか離れていなかった。キシの母親は彼女が6歳のときに亡くなった。継母ミナは、とても優しい心の持ち主であった。父マサキチは、藍染めの仲買人であったが、仲買人仲間で、可部村では立派な家出身の男が養子としてきたのだが、商売が下手でその保証人になっていた父は破産した。

父親の再婚によって、多くの子どもがきたとあるが、異母きょうだいが何人いるかは聞き取られていない。きょうだいが多かったにも関わらず、キシが健康であるためにいりこや卵など良いものしか与えられず、漬物を食べなければならないことはなかった。妹や弟 (B08, 143. いずれも単数表現) が若くて死んだからだと思われるが、正確に何人いたかはわからない。ただ、異母妹のトシコは、キシと日本を繋ぐ唯一の人となるも、1986年に90歳で死去する。トシコには、2人の息子と娘が1人いたが、

1人の息子は癌で若くして亡くなり、もう1人は Tendai (帝大のことか?) を卒業したが、戦争で死んでしまったという。

小学校と高等小学校、さらに補習校 (補習科の間違いか?) まで行ったという。町のハイスクール (可部町立実科高等女学校のことか?) には行けなかった。それは事業破たん後、両親が現金収入を得るために始めた、豆腐や油揚げをつくる仕事を手伝わなければならなかったからである。だが、そこで学んだ技術はハワイでも役に立った。

媒酌人は隣の飴屋さんで、オキ家もツジムラ家ともよく知っていたが、ハワイでアレンジしてくれる家族や友達のために、写真を交換し、見合いを正式に行い両家をたてた。三々九度、役場で登録、6か月間ビザが下りるまでの間、義理の両親と一緒に暮らした。といっても、実家は3軒先なので、やなことがあれば実家に帰ったという。

媒酌人は隣の人で、3軒先の花嫁を迎えるのにわざわざ写真を交換していることになる。

湯沢雍彦によると、「農漁村に居住者する人が多かった時代には、地主層を除いて、結婚相手は村内で見つけるのが普通だった。・・・中略・・・個数は百ないし百五十戸ほどでも小学校も一つだけあったから、相手の顔や名前は大体わかっており、見合いの必要もなかった」(湯沢、2005:190) と述べている。村や町が大きくなり、仕事を求めて人々の移動が激しくなる明治中期以降で、斡旋者の役割が大きくなり、折しも写真館が増え、見合い用の写真が用いられるようになった延長に「写真花嫁」がある。だが、写真花嫁の場合は、故郷とつながりのある「ところのもの」が重要な役割を担い、出身地またはその周辺の村で花嫁をみつけるために交換が行われている。また、写真花嫁が夫へ嫁ぐ際には、海を渡る花嫁にハワイにいる親戚に託していることがわかる。

夏目漱石もそうであったように、写真を交換して、「見合い結婚」をすることは、近代的であった。し

かし、多くの農村出身者にとっては、村内、あるいは近隣の村から花嫁を得る従来の慣習を遂行するためには、その距離ゆえに写真を交換することが合理的であった。花婿が帰って花嫁を探すには、自らの往復の船賃と、花嫁の片道の船賃がかかる。また、

徴兵のおそれもあったため、花嫁のみの旅費で嫁ぐ「写真花嫁」は合理的であったのだった。

3軒先から花嫁を迎える息子のために写真を交換することは、近代そのものであったのだろう。

3. 結婚式と写真

3-1. ムウムウとホロク

1911年にハワイにつくと、ソトは、日本髪を結うとより背が高くみられるために、髪をリボンで結ぶだけで下船している。しかし、イミグレーションで2週間もソトは待たされた。夫が別の島からくるといふ事情があるのだが、他にもあと2組取り残されていて、合計3組の夫がそろろうと、牧師に式を挙げてもらっている。「キリスト教式の儀式を英語でやったのだらうと思った。その義理式の後、二人は結婚したといい互いに握手した。それで終わり」（B03, 60）だったという。

1911年にソトはキリスト教式の儀式を移民局で行っているが、1913年に来たタツノは3日間試験に合格するまで拒否されたとある（B04, 77）。広島出身者が経営していたコメヤホテルへ泊まる浪花節語りを生業とする夫をもつ女性に頼んで、夫と連絡をとってもらった。たいていの夫はhakku（貸し馬車hackneyのことか。日系人がhakkuと呼んでいたのだと思われる）を借りて花嫁を迎えに来る。タツノは、ホノルルの神道の「大神宮」で結婚式をあげた。

柳澤幾美によれば、港での集団結婚式は1912年まで行われた。現地の日本語新聞ではこれについて批判が相次いだ。『ハワイ報知』の創始者、牧野金三郎は、創刊号（1912年12月）の社説において、キリスト教を押し付ける強制的なものであり、集団結婚式は人道に反すると主張した。1913年1月25日に外務省通商局長坂田重次郎の名前の通達により、ハワイでは到着港移民局での結婚式は取りやめることと

なった（柳澤、2005；183-185）。ソトとタツノの結婚式の違いは、このような背景があった。もともと結婚式も挙げないでくる花嫁への不信感からキシリスト教式の結婚式をするようになったのである。

ソトと夫クニヨシの1911年の結婚写真（B03, 60）は、背の高いソトは座っている。日本髪を結って、着物に羽織姿で手を羽織のなかに入れていた。借金のあったクニヨシではあるが、黒のスーツ姿にネクタイで手を後ろに回して立っている。胸元には花を飾り、故郷の両親を安心させようという気持ちがあったのであろう。花嫁衣裳というほど、豪華な着物を持ってくるものは少なかった。普段より上質な訪問着に羽織が多い。黒紋付きに角隠しという姿の「発明された伝統」的な結婚写真は、1930年代に結婚式をあげた2世に多い（川上、2016；79、82、84、96、97など）。

1909年に撮影された結婚式の写真も娘メーベルのもとにのこされている。『ハワイ日系移民の服飾史』の〈写真132〉のキャプションには、「カワカミ・フクタロウ、ヒサ夫妻の結婚写真。彼はカウアイ島でもっとも成功した実業家のひとりである。私（バーバラ）はカウアイ島のこの夫婦の娘さんの家に行き、その母ヒサが1908年に福岡から持参した私物箱のなかからこの写真を見つけた。」（川上、1998：280）とある。フクタロウは黒いおそろくウールのスーツに濃い色のネクタイにシャツを着ている。5フィート4インチ（162cm）あったそうだ。柔道家のような躯体（福岡では相撲をしていた）で精悍な顔つきで椅子に腰かけている。ヒサは西洋あるいはハワイ

式と思われる白いドレスを着てたち、フクタロウの座る椅子に手をかけて立っている。

同書の別の[写真17]で花嫁が着ている衣装とよく似ている。これもメーベル・ハシサカ所蔵であるが、キャプションには「カウアイ島カパアでの1世の正式な結婚式の写真。花嫁はヨークと袖にレースのフリルのついた優雅なムウムウを着ている。1912年から1915年の間に写されたもの」(同書、54)とある。ハワイの「正式な結婚式」での花嫁衣裳は、西洋風のウェディング・ドレスとは異なる「西洋的なハワイアン風」ともいうべきものだ。この時代の花嫁は、首もとまでしっかり覆われたドレスである。[写真28]のトキ・タガも「タガは姉が彼女のためにつくってくれたムウムウを着ている。1918年9月24日。トキ・カメゾウ所蔵」(同書、74)とあり、同じハワイアン風ドレスと思われる。これが後述する1世の女性が公的な行事のときにきたホロクなのかはわからない。ムウムウを着ていても写真花嫁の共通点は日本髪を結っていることである。そのせいかベールを被っていない。

Sonia Shinn Sunoo著“Korean Picture Brides; A Collection of Oral Histories”のなかに掲載される朝鮮半島からの写真花嫁のほうが、西洋的なウェディング・ドレスとベールを身に着けている。

姉が作ったムウムウを着て写真をとったタガは、ホロクについて述べている箇所がある。同じ船に乗っていたハワイの婦人がホロクを着ていたのだ。

「かわいらしい白のホロク[holulu]を着ているハワイ人のご婦人がひとり乗っていました。

『彼女はまるまると太っているけれどとても素敵に見えるわ』と私は思いました。そのホロクが彼女の大きな腰をかくして彼女をきれいに見せていたわ。ハワイの人達が話をするのを聴いていると、その話しかたには美しいリズムがあると思ったの」(川上、1998:76)

服飾史の本に、彼女たちが着ているムウムウのようなドレス、そしてホロクの変遷については解説がないのが残念である。

ソトはハワイのインターマリッジについて興味深い証言をしている。

キラウエアの小さなプランテーションの人々は、日本からの花嫁の到着に興奮していた。「そのころはね、1世の男が日本から嫁さん連れてくると、支配人はお休みをくれたもんだよ。夫は中国人のキャンプに暮らしていたんだ。そのころは、多くの中国人は独身で、ときどき、ハワイの女性であるワヒネとintermarryしたが、中国人は決して日本人とはintermarryしなかった。多くのハワイ人がキラウエアにはいたよ。宴は盛大で、どのエスニックグループからも多くの友達がきたよ。お祝いは3日続いて、ごちそうをして、歌ったり、お酒もたくさん飲んだよ」(B03, 62)

ソトの夫は博打で多額の借金があり、3日もつづくお祝いのできたのだろうか。慶事に、支配人がいくらか出していたのかもれない。

夫の借金を返すためにソトも働くようになる。夫の部屋にシンガーミシンがあり、使い方を教えてもらった。夫が最初に作ってほしかったものは、日の丸だった。ハワイでは第二次世界大戦までは、どの日本人の家でも天皇誕生日には日の丸を掲げたものだった。日露戦争に勝利した後のナショナリズムの高まりは、ハワイにもあったことを感じさせる。

1911年にソトがきたときは、1世の女性たちはハワイの「ホロク(裾のあるムウムウ)」(B03, 62)を、特別なときに着るので、翌年には自分でも見様見真似で縫ったという。残念ながらバーバラに見せた白いホロクを着たソトの写真は掲載されていない。

服飾史が専門のバーバラのインタビューには必ず、どんな種類の着物を持ってきたか、労働着をどのよ

うに工夫してシンガーミシンで縫ったか、独身者のボタンや靴下を繕うことで、お金を稼いだかが語られる。

宮本なつきによれば、ソトが縫い特別なときに身に着けたホロクは、チャイナ・タウンにあふれていた日本人娼婦が身につけていたという。英備生「布哇に於ける我姉妹の惨状」（鈴木裕子編『日本女性運動資料集成第8巻人権・娼婦I』不二出版、1997年、161頁）を引用しながら次のようにまとめている。

このような日本人売春婦の姿は周囲の目にどうのように映っていたのだろうか。浴衣に細紐という姿の女性もいたが、多くは「ホーロク」と呼ばれるハワイアン女性たちが着用した西洋風のドレスを身につけ、商売する時に限らず普段からホーロク姿で町を歩いていた。顔を真っ白に塗った遊女の姿を見慣れている日本人男性でさえも、ハワイ日本人売春婦のホーロク姿は「寝衣」のようで「見苦しき事言はん方なし」、「此等を見る白人にて未だ日本に來たりたる事なきものは、是が日本人の服装ならんと即断して軽蔑の念を起すなるべし」と批判している。

（宮本前掲書：52-53）

1900年のチャイナ・タウンの大火以後、日本人娼婦の風俗が変わったのか、1世女性たちの記憶から10年もたつと、ホーロクが別の意味を持ったのか服飾史の専門家であれば、ここは掘り下げてほしかった

点である。

3-2. 花婿のスーツ

1世の結婚式写真で紋付であれ、着物姿で花婿が写真に納まっているのは希である。大半が、ダーク・スーツである。

男性の服飾についてであるが、バーバラ・川上は、1916年のネコモト家で写された結婚式のグループ写真からは、初期のこの2世の花嫁花婿の装いがどんなだったかを見せてくれるとして解説をしている。かつての写真花嫁たちは、その時もってきたであろう訪問着とおもわれる和装で、髪を日本髪にしている人もいる。2世の花嫁は、黒留めそでに角隠しをしている。男性の参列者は全員「一張羅をまとっている」のだそうだ。しかし、幾人かは消して適切だとはいえない装いである。というのも初期の頃、「ハワイの1世は靴や上着を買うだけのゆとりがなかったから」結婚式や葬式に出席するためにしばしば衣装を借りた（川上、1998：90）という。借金を抱えていても、ソトと写真をとるために、借りた衣装で写真に納まっているのかもしれない。

借りずにスーツを揃えようとするといくらかかるのか。「一九二〇年代の白の麻のスーツは七十五ドルほどの値だったという。ほんのわずかな1世の男性だけがそのような贅沢を許された（通常の暗色のウールのスーツは二十ドルほどでつくることができ、それすらプランテーションの労働者のひと月分の給料に相当した）」（同書：93）とある。

小 結

1915年までにハワイに到着した花嫁たちの定位家族について分析した。第1次世界大戦終決後については研究ノート第2部に記す。バーバラ・川上による写真花嫁への聞き取りは、彼女たちが残した写真とともに展開されるので、その当時の風俗史を追う

手がかりにもなる貴重なものである。あますことなく紹介することはできない。原文の『ピクチャー・ブライド・ストーリーズ』を、『ハワイ日系移民の服飾史 緋からバラカへ』と並行して読むことを推奨したい。

参考文献

- 飯野正子 (2000) 『もう一つの日米関係史：紛争と強調のなかの日系アメリカ人』 有斐閣
- 伊佐由貴 (2012) 「二〇世紀初頭ハワイにおける日本人移民と徴兵—第一次世界大戦の選抜徴兵制と国家の『暴力』—」 『歴史評論』 (744), 42-55.
- Glenn Nakano, Evelyn (1986) *Issei, Nisei, War Bride: Three Generations of Japanese American in Domestic Service*, Temple University Press
- Ichioka, Yuji (1988) *The Issei: The World of the First Generation Japanese Immigrant, 1885-1924*, Free Press (富田虎男、糸井輝子、篠田佐多江訳 『一世—黎明期アメリカ移民の物語り』 刀水書房, 1992年)
- Kawakami, Barbara F., (1993) "Japanese Immigrant Clothing in Hawaii, 1885-1941", University of Hawai'i Press (バーバラ・F・川上、香月洋一郎訳 『ハワイ日系移民の服飾史 緋からパラカへ』, 平凡社, 1998) (神奈川大学常民文化叢書 5)
- Kawakami, Barbara F., (2016) *Picture Bride Stories*, University of Hawai'i Press
- Nakano, Mei T., (1990) *Japanese American Woman: Three Generations 1890-1990*, Mina Press and National Japanese American Historical Society, (サイマル・アカデミー翻訳科訳 『日系アメリカ女性—三世代の100年』, サイマル出版会 1992).
- Sunoo, Shinn Sonia (2002) *Korean Picture Brides : 1903-1920 A Collection of Oral Histories*, Xlibris Corporation
- 工藤美代子 (1983) 『写婚妻 花嫁は一枚の見合い写真を手に海を渡っていった』 ドメス出版
- 糸井輝子 (1995) 『外国人をめぐる社会史 近代アメリカと日本人移民』 雄山閣
- 小山静子 (1991) 『良妻賢母という規範』 勁草書房
- 島田法子編著 (2009) 『写真花嫁・戦争花嫁のたどった道 女性移民史の発掘』 明石書店
- 陳延媛 (2006) 『東アジアの良妻賢母論—創られた伝統』 勁草書房
- 田中景 (2004) 「女性の市民的役割と『写真結婚問題』」 『社会科学』 (同志社大学人文科学研究所) 72; 149-171.
- 田中景 (2006) 「『写真花嫁』の写真：移民の可視化と移民政策の実行についての考察」 『県立新潟女子短期大学研究紀要』 (人文・社会科学編) 43; 261-270.
- 真壁知子 (1983) 『写真婚の妻たち カナダ移民の女性史』 未来社
- 宮本なつき (2002) 「契約移民時代のホノルル日本社会と日本人売春婦」 『比較文化研究』 (九州大学大学院社会文化研究科) 12; 47-57.
- 柳澤幾美 (2003) 「『写真花嫁』問題とは何だったのか—その言説の形成を中心に」 『異文化コミュニケーション研究』 (愛知淑徳大学大学院コミュニケーション研究科異文化コミュニケーション専攻・言語文化研究所編) 6; 11-24.
- 柳澤幾美 (2004a) 「『写真花嫁』移民禁止の経緯—日米外交の視点から」 『移民研究年報』 10, 97-107.
- 柳澤幾美 (2004b) 「二重の偏見 —『写真花嫁』イメージに隠された日本人女性移民の実像—」 田中きく代・高木 (北山) 眞理子編著 『北アメリカ社会を眺めて—女性軸とエスニシティ軸の交差点から』 関西学院大学出版会; 145-163.
- 柳澤幾美 (2005) 「ハワイにおける『写真花嫁』問題：日本政府の対応を中心に」 『金城学院大学論集. 社会科学編』 1(1-2); 180-193.
- 柳澤幾美 (2006) 「ハワイに渡った日本人『写真花嫁』たち：最初の『写真花嫁』から最後の『写真花嫁』まで」 『金城学院大学論集社会科学編』 3(2); 129-141.
- 柳澤幾美 (2009) 「『写真花嫁』たちのオーラル・ヒストリー—カリフォルニア州立大学サクラメント校一世オーラル・ヒストリー・プロジェクトより—」 『海外移住資料館研究紀要』 3; 61-73.
- 湯沢雍彦 (2005) 『明治の結婚 明治の離婚—家庭内ジェンダーの原点』 角川学芸出版